

## 資料紹介

## 武官村の殷代大墓

岡田 芳三 郎

一九四九年冬、中共ではもとの中央研究院歴史語言研究所が改組されて新しく中央科学院が成立し、再び活潑なその活動が期待されることとなつた。ここに紹介をこころみた武官村の大墓とは、この科学院が有名な安陽殷墟の發掘事業を再開し、一九五〇年春四月から六月まで約六十日を費して發掘調査を行った結果、ようやくその内容が明らかとなつた殷代大墓の一つである。

本墓も残念ながらすでに盜掘の厄にあつていて、主柩におさまつていた筈の貴重な副葬品などは殆んど失つていたことは誠におしいが、しかしこの發掘によつて明らかにされた殷代殉葬の制に関する事実には全く驚くべきものがあるし、更にまた本墓はわれわれがこれまで知り得た個々のいくつかの遊離した遺物について、それがもとはどこなどところから、またどのような状態で出たろうかと云うことを考える上にも役立ついろいろな貴重な知見をもたらしてくれた。もしそう云う既知の遺物をもつて補いながら考えてゆけば、われわ

れはそこに殷代大墓の内容に関して一つの典型的な場合をあらかた推知することもできるかと思う。

さて本墓の位置は武官村の北約一〇〇〇米、前營村の西三八〇米の地点にあり、附近にはなお四つの大墓があるが、これらは有名な侯家荘の大墓なども互に続きあい、このあたりが小屯村東北地の宮室中心地区に対し、殷代王室陵墓の營造地域と考えられるわけである。

本墓の主軸は大体南北の方位をとり、墓室は東西十二米、南北十四米の方形であるが、これに幅六・一米、長さ十五・五五米の南道と、幅五・二米、長さ十五米の北道とが続いている。墓室の深さは四・七米であるが、両墓道はゆるやかなスロープをなしつつ下降し、墓室床面の深さに至つてその南北に開口している。ただし墓室と云つても、それは若干の副葬品を内におさめつつ封土をもつて埋められていたもので、本墓の中心となる主体部はこの墓室床面のほぼ中央を更に二・五米掘り下げて作つた柩室にある。しかしこの柩室を作る際には、掘り出した土をあげる工程のための土階を南道の正面に掘り残したほかは墓室の全面を二・五米掘り下げたらしい。かくて出来た壙底を清理してそこに柩室をきずけばよいわけであるが、さらに本墓でも殷代の墓にしばしば見る腰坑をその中央部に

くついている。

この腰坑の深さは一・二米。その中からは藍白色に変じた人骨一  
架と、方形の「内」をもち、長さに比して幅が広くて長三角形に近  
い形をした頑丈な戈一本とが出た。ここに葬られたものは殉葬され  
た守衛人と考えられるが、彼の役目は地下の鬼怪妖物から墓主の靈  
魂や死屍をまもることであつたらうと發掘者郭室均氏は述べている。  
なおこの腰坑の深さは現在の地下水位以下に及んでいるため湧水を  
見、人骨もその中にひたつていたが、郭氏は古伝にいわたる「黄  
泉に及ぶ」と云うのはこれに当るかと述べていることもあげておき  
たい。

さてこのようにして腰坑の殉葬が終つたのち、清理平鋪された土  
壙の底面には角材三十本を南北の方向にしきつめて、まず柳室の床  
がつくられる。この上に柳の四壁がくみ立てられるわけであるが、  
それには東西壁をなすべきやや長い角材と、南北壁をなすべきやや  
短い角材とを井の字形に組んで榫状のものをつくり、これを床土に  
すえ置いて、土壙四壁との間に土をつめ、錘杵築堅して動かないよう  
に固める。次にまた井字形榫組み一段をその上に重ね、周囲に土を  
つめてつき固める。このようにして層々重ねること九段におよんで  
高さ二・五米の柳室が出来上がるが、柳の上頂は床と同じく角材杭木  
をならべて天井をつくり、これが周囲のうめ土の上頂と共に前記墓

室の床面をなすわけである。

次にこの柳室の内容であるが、すでに述べたように本墓は相当古  
い時代に盜掘にあつており、しかもその時、火を發したらしいので、  
木炭化した杭木は柳の構造などをよく残してくれたが、しかし盜去  
残余の遺物などは殆んど灰燼に帰してしまつた様子である。このよ  
うな次第で主たる棺などは証跡すらなくなつてゐるが、早くから柳  
頂の漏滅より流入した水によつて柳の四隅に積み上げられていた鬆  
土は、さいわい若干の遺物をよく保護してくれたので、それらが今  
回の發掘收穫となつたわけである。

いまその種類を云えば、それらは玉器・銅器・彫花骨・雕石・白  
陶・蚌飾等に及んでいるが、いづれも殆んど破断片となつてしまつ  
ている。銅器には鼎・爵・尊・罍・斝・方彝のほか戈・鏃刀・鏃な  
どが見られるが、すべて大ふりで、文様の鑄出しもすこぶる精巧で  
あり、本墓の殉葬者（後述）がもつてゐる銅器などとは比較になら  
ぬ優品であると云う。しかもこれらが何れも無惨な破断片のみにな  
つてゐると云うことは如何にもおしいが、その中でただ一例、長さ  
十八釐、饜饕獸面と三角形垂花紋とをもつて飾つた銅鐃（袋穂の斧  
頭）一本が完形品として出てきたことはせめてものなくさめである。

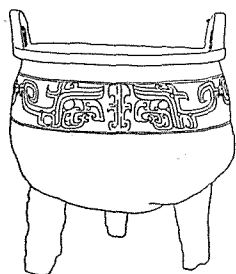
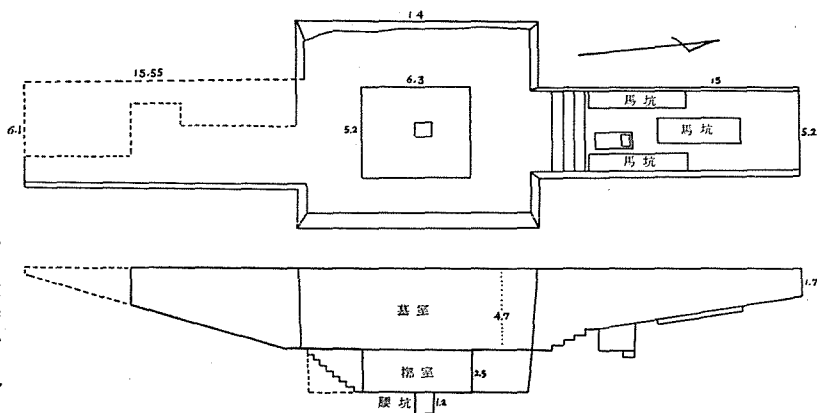
容器としてはこのほか高さ十七釐余の白陶甗、径十二釐余の白陶  
淺鉢がその形をほぼ保つていたが、なお鏃や罍・尊などの断片數十

が出、少くとも白陶はもと十器以上あつたことも知り得た。玉の類では当時甲骨に文字をきざみつけるとき用いた刻字刀の形を、そのまま玉で模したかと思われる精質半透明の碧綠色玉刀一本が出てきたが、これはまさに珍重すべき逸品であるけれども、この他には殆んど云うべきほどのものはない。雕花骨には骨筭・骨匕・骨板などがあるが、焼余の木炭と接触共存したためか変質して黒亮色となり、光沢を發する頗る美しいものも見られた。またこの槨室から出たものとして更に注目すべきものに木器の印痕がある。もちろん本質部はすでに腐朽し去つて残らないけれども、器の表面に塗抹された鮮麗な朱は膜状をなして槨内をうずめた土の中に残っているから、それを細心に調査すれば、もここに木器も副葬されていたことが知られたわけである。それにはやはり美しい紋様が刻せられていた。

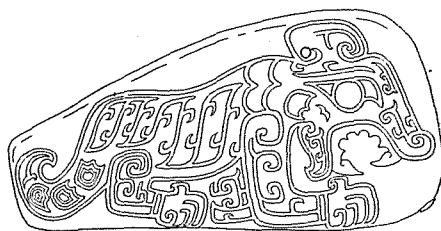
以上槨室内部の出土品についてそのおもだつたものを述べたが、棺がおさまりこうした副葬品がおさめられると、つぎに杭木一排在もつて槨蓋がおおわれる。そしてその上に鋪土一層が加えられるが、さらにその上は朱塗りの大きな雕花木板をもつて蓋い飾つた様子が知られた。もちろんこの木板も印痕として出てきたが、この板の上で、ちようど槨頂の西偏にあたる場所から発見された石磬一枚はまた重要な發見品である。長さ八十四種、帯青色白大石をもつてつきり、その一面には完好な獸形紋を突線であらわしているが、今も銅

声に似た清越な音を發する。またこの磬の近くからは清美な彫刻を加えた木器の印痕が三ヶ所あらわれたほか、盞・盃・皿等の石製容器も出、さらに石製の角形物・函形物・耳形物などが出た。(これはもと木彫か何かに附装されていたものではなからうかと思う) 以上の槨頂に対してこれをとりかこむ墓室の床面は幸い盜掘によつてあらされていなかったが、ここから発見された計四十一体をこえる殉葬例は本墓發掘の意義を重からしめる重要な事実である。その大体の様子は挿図に示すごとくであるが、まず東側(E)について云えば、ほぼその中央位置にあるE9は陪葬人中最重要の人物であつたらしく、棺痕は長さ二米、幅〇・八米をはかり、その中から銅容器四(爵・觚・盃各一、何れも有銘)のほか戈三本、青銅小刀子、いわゆる弓形銅器、若干の玉飾などが出た。また棺外東側からは大骨一、西側からも一、棺蓋の上にあたる位置から二、計四匹の犬骨が見出されたことも特に目をひく。

このE9を中にして、それより北におさめた殉葬者には棺なく隨葬物もないのに対し、南では棺をともしなうもの七、副葬品を出したものを四を数え、ことにE14の棺は一方がせばまつている上に、そのせまい方の端が半円形につくられているのは珍らしい。またE10は銅爵・銅觚・玉魚を出したが、その右腿骨の側から猴骨一架が現れ、あるいは墓主のための養猴人かと思われるのも面白い。

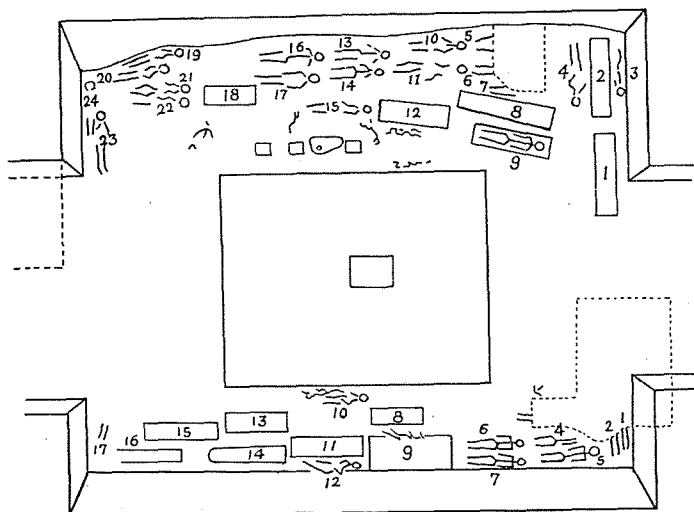


E 14 出土 鼎



大石罨

W



この東側に対して西側(W)では主棺に近いものが棺を有し、外壁に近いものはそれをもたない事が目立つているが、ここではW8が最重要人物であるらしい。その棺は長さ二・二米あつて最大であるが、また一方がせばまる式のもので、中からは銅容器四(鼎・爵各一、匚二)銅戈・銅刀各一、銅鏃のほか馬鈴三、犬鈴三、馬の絡頭に附装されていたボタン形銅飾二十一と銅当頸二とが出た。また玉鳥断片・石管などもあるが、ここから出た戈はその内のところに鳥羽をつけているのが珍らしい。またW12は犬骨三を伴つていた。

以上おもだつた殉葬例をあげてきたが、総體的に見れば、東側出土の戈は六例あつてみな重厚実用にたえるものであるが西側は三例、みな小づくりで中には羽飾りのものもあること、玉器は東側五例に對し西側十例、緑松石は東側零なのに対して西側五例、また東側は俯身葬四例に對して西側十一例——などのちがいが見られる。郭氏は中国の伝統的風習において、男子側重は左、女子側重は右することから考えて、或いは西側殉葬人には女子が多いのではなからうかと考えられるが、しかし骨架がみな腐朽して測定することができない故、いまは臆測をさけねばならないと述べられていることを註記しておきたい。

また人数において西側の二十四は東側の十七に對して五割方多いが、墓室の構造において見る場合、墓道が墓室に對して西に偏して

いるばかりでなく、東壁が整正なのに対して西壁が凹凸不整な点から考えると、随葬者が多いため、西側を臨時拡張したものかと考えられる点も郭氏はのべられている。なお以上の殉葬者のほかに、東側からは鹿骨一、不知名獸骨九、西側からは猿骨二、不知名獸骨六を出したこともあげておかねばならない。

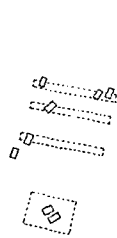
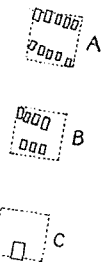
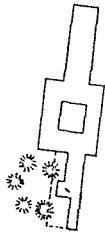
さて以上の殉葬者が葬られてのち、墓室は封土を以てうめられてはいるが、現在この封土には三十の層が見られる。即ち一層一層と錘杵封築して行つたわけであるが、この間に人頭骨三十四が検出されたことは最も注目にちたいたする。もつともこれらの人骨は一つの層からまとまつて出たのではなく、深度三・七米から三米の間では西側五東側六、深度三米から二米では西側三東側六、深度二米から一米の間では西側五東側三と云う配列で出たが、原位置不明のもの若干をのぞいて、それらはすべて面を中央にむけて上下直立のすがたで整然とみずめられていた。これら犠牲者の体軀は本墓のどこからも現れてこず、その点、前記の殉葬者が身育完全であるのとは著しい相違を示していることは、両者の性質のちがいを考えさせるものでなければならぬ。

以上で主体部たる櫛・墓室の説明を終り、つぎに南北墓道について述べたいが、まず北道からは馬坑三つがあらわれ、東よりの馬坑から順次に数えて四・六・六、計十六頭の馬骨が現れた。しかもそ

のなかには緒頭をつけ馬鈴をさげたままの姿をとどめているものがあつて、股代装馬の制を知る上に貴重な資料を得たが、しかも馬衝はついに出てこなかつたと郭氏は述べている。この三つある馬坑の中央のもの前（墓室よりの場所）には、更に一つの土坑があるが、

その坑中の北辺は一段と深くなつていて、ここから人骨二架が対蹠の姿勢で出てきた。東側の人物はそばから戈を出し、西側の人物は大鈴と同じ形の銅鈴をもつていたが、前者は本墓の後門にあたる北道をまもる守衛人であり、後者は大馬を飼育する係りの者であつたかと考えられる。しかし北道ではまだこの他に、東および西側の馬坑と墓室との間の場所からそれぞれ二匹の犬骨を出土したが、これもちよつと大門の両傍に蹲居する番犬と同じく、守門の犬と解せられる。

南道は近人の墓地となつているため、まだ充分な調査ができてい



ないが、すでに發掘した部分から馬坑も二つ出てきているし、また玉鏃を右胸部にもつた守衛人も脆葬の姿勢で一架空らわれてきているので、全体として南道の犬・馬・衛人の制度は、北道と殆んど同様であると考えられる。

以上要するに、本墓は地下黄泉に達する墓坑をつくり、頂辺には拱衛あり、腰坑下面には伏埋あり、一辺侍従・一辺姬妾？珍禽異獸をいれ、前後には大馬警衛をおく、中間土中には柳をめぐらし柳中に棺あり、棺の内外また珠玉・珍宝を以て充塞すると云つた風で、当時の王侯の厚葬ぶりには驚くべきものがある。ことにここにおさめられた犠牲の数は人頭骨三十四、殉葬人四十五、計七十九人。さらに獸骨の数も五十二に及んでいる。これらがすべて一人の墓主のためのものなのであるから一驚させられるが、ここにわれわれは殷代の王者と云うものの性格をはつきりと知ることができよう。

しかし頭骨のみがあつて体軀は本墓から見出されなかつたものの遺骸はどうなつたのであろうか。それに答えるものは次にのべる、郭氏が排葬坑とよんでいるものである。

郭氏等はこの大墓より南へ五十三

米、東に七米かたよつた地点で、十米四方のA区と、さらに南十米の間隔をおいて同じく十米四方のB区を掘つたが、A区からは小規模の墓坑が五つづつ二列計十、B区からは第一列四、二列三、計七つが現れてきた。何れも長さ二米に幅一米、深さ二米と云う大きさを前後するものであるが、しかも驚くべきことには、(その人数に多少出入りはあるが)大たい十体づつの無頭人骨がこの小墓坑からそれぞれ出てきたのである。二人は足を北向けにし他の二人は足を南向けにして入れ、その上に更に同様にして四人、またその上に二人と云つた具合にして十人づつを入れているわけであるが、或ものは断首がまずく行つたものか顎骨が坑内に飛び散り、或ものは顎骨から下が残つていて歯牙がむき出しであるものもあつて、まことに凄惨をきわめた様子であると云う。これらこそ前記大墓の人頭骨とむすびつくものだと一応考えられるが、しかしA・B区をあわせ人骨は一五二人分あり、また前記大墓とはややへだたつている上にこの二方区は試験的に掘つたもので、まだ北に掘りすすめば同様なものが将来現れるかも知れず、さらに大墓は附近にまだ四座あるのであるから軽々しく断を下すことは出来ない。

しかしこうしたものが前記の人頭骨と関係した特殊な墓坑であると云うことにまちがいが無いと思われるが、ここで更に郭氏等がC方区及びその南でこころみた探溝から見出した一群の墓坑がとくに

注意をひく。これらは前記排葬坑のように整然と一定の計画を以てならんではないし、大小もまちまちであり、或ものからは無頭人骨三十が出るかと思えば、或ものは無頭人骨四のほかに頭骨十五をいれているものもあつて、全体として一定したものが見られない。そこで郭氏はこれらが前記の計画性をもつた排葬坑とは性質のちがうものである点に着目して、これを散葬坑と呼んだが、あるいはこれは年々行われる追祭の犠牲に関する墓坑ではないかと云う想像もできると述べている。その理由は追祭では亀卜等によつて犠牲の人数も年々問われるわけだから一定しないと云うことにあるが、面白い解釈であると思う。しかしなお向後の発掘によつてそうした問題がより明確に解明され、また他の四つの大墓も明らかにされるほか、今次の大墓にも車坑とか何かの付随した葬坑があるかないかなどの問題も将来明らかにされる日の遠くないことを期待してやまない。

本稿は中国考古学報第五冊に發表された発掘者郭宝均氏の報告を簡略にして紹介したものである。なお同報告書には洹水の南、四盤磨村の附近で行われた発掘結果ものせられているが、紙幅の都合上、これは割愛したことをこわつておきたい。